

琉球大学学術リポジトリ

恐るべき鶏の病気 マレック氏病について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-07-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松田, 祐一, Matsuda, Yuichi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/21300



恐るべき鶏の病気

マレック氏病について

はじめに

マレック氏病という聞きなれない病名を耳にしたのは、数年前のことで、この病気が本土の養鶏場に損害をもたらしていることを養鶏雑誌で知らされても、遠く海をへだてた沖縄とは、当分無縁のものだろうと気にもとめないでいる間に、近頃になって、沖縄でもマレック氏病らしいものが、蔓延のきざしをみせているということで、養鶏家に不安を与えている。それでは、このマレック氏病とはどんな鶏病かということについて記したい。養鶏家の皆さんの参考となり、本病予防の一助になればと願っている。

◆白血病とマレック氏病

最近到着した万国家禽学会誌に、マレック氏病は、鶏の白血病の急性型のもので、他の何れの病気よりも大害を与えるものである。この病気はまた次の言葉で知られている。すなわち、「神経型リンパ腫症、癱痺、神経炎、眼が白色や灰色になる眼型リンパ腫症などと同一のものである」と説明している。

今日まで、沖縄の養鶏業に大害をもたらした鶏病は、いわゆるキモバレまたは肝肥大症といわれたもので、産卵を開始した若雌に多発し、その後も慢性的にポツリポツリ発生し、解剖してみると肝が大きく肥大していて文字通り肝肥大症であるが、これはむずかしく書くと鶏白血病といわれる中の、内臓型リンパ腫症である。一種のガンであるといわれている。

マレック氏病というのは、前述したように従来の神経型リンパ腫症、眼型リンパ腫症とまったく同じものであると考えていたが、近頃になって、内臓型リンパ腫症で、4カ月齢以下の若いひなに発生するものが増えてきて、この若齢型のリンパ腫症は、急性マレック氏病の内臓型であるといわれるようになった。

それで、鶏白血病の内臓型と急性マレック氏病の内臓型とは、鑑別がきわめてむずかしくなっていて、同じ鶏群に両者が同時に感染していると思われる例もまれではないといわれる。ただ、4カ月以下の若い雛に発生したものは急性マレック氏病によるものと考え5カ月以上の若雌に発生した内ゾウ型は鶏白血病の内ゾウ型と考えるのが妥当である。

急性マレック氏病は、しばしば卵巣、腺胃、肝、脾などの臓器にリンパ性の腫瘍がみられるのが特徴である。

本土で急性マレック氏病が発生したのは、196年以後で、その以前は神経型のリンパ腫症の形をとって発生する定型的マレック氏病が主なものであった。この定型的マレック氏病は3～5カ月齢の若いひなに発生することが多い。症状としては、脚の癱痺、ケイレン、全身の癱痺が特徴で、もっとも目につき易いのは、脚をおかされた時である。最初は鶏を走らせたときだけ、足どりの異状に気がつく程度であるが、病気が進むと癱痺はひどくなり、起立できなくなる。片脚を前にのぼし、片脚を後にのぼした特徴のある姿勢をとったりする。脚

以外の部位の神経も侵されるから症状は、ちがうこともある。その他あえぐような呼吸困難、体重減少、顔面蒼白などの症状もあらわれる。この定型的マレック氏病は、必ずしも急性の致死的な病気ではないが、通常の条件では、病鶏は、おしつぶされたり、飲水、採食ができないうちに死ぬことが多い。内臓型の急性マレック氏病は、神経症状を示すとは限らないが、まずはじめ、異状に高い死亡率や多数の衰弱のひなを見て、気のつくことが多い。

◆ 感 染

マレック氏病というのは、ウィルスといわれる非常に小さい生物によって起る鶏病で、鶏から鶏へ伝染するし、空気伝染も高率に起るといわれる。鶏糞を乾燥する場合は、空気伝染することが考えられる。その他、鶏の唾液、涙などの分泌中にもウィルスの存在が考えられるから、病鶏によって汚染された餌や水も十分に感染に役立つことになる。種卵を通して、ひなに伝染するというのもいわれているが、未だ証明はされていない。

◆ 防疫のための研究

マレック氏病は、1907年マレック氏によってはじめて報告されて以来、鶏死亡の重要な原因となっているので、本病の病原、症状、予防などについて多くの研究が行なわれているが、養鶏家にとって大切な予防法、治療法は、未だ見出されていない。

今後、本病に対する予防法として考えられることは、遺伝的抵抗力の強い系統を作り出すことであり、その可能性もあるといわれるが、現在研究中であって普及の段階ではない。次に、ワクチンの予防接種による本病の防圧であるが、アーバーエーカー社あたりで相当研究が進んでいるというが、現在のところ実用化されるまでにはなっていない。

◆ 防疫のための勧め

現在マレック氏病に対する有効確実な防疫法は見出されていないが、本病による損失を最少限に食いとめるには次のような方法が必要である。

(1) ふ卵器、育雛器、器具、育雛舎内外の十分な消毒

(2) ひなと成鶏の飼養管理の区分

敷地がせまいため、育雛舎と成鶏舎がきわめて接近して、育雛設備の消毒は十分実施しているにもかかわらず、成鶏舎からとんでくるホコリ、羽毛などによって、育雛舎がよごれることが考えられるから、できるだけひなは成鶏舎から離すこと。

(3) 育雛管理者は、成鶏管理者と別人にすることが望ましい。それが不可能であるならば、育雛舎の仕事をして後に成鶏舎に移るようにし、成鶏舎の病原を育雛舎へ持ち込まないよう注意することが必要である。成鶏は、総ての病原菌に対して、ひなよりも抵抗力が強いので、成鶏には発病しなかった病原のウィルスが、成鶏舎から育雛舎へ持ちこまれて、ひなに感染することもあるのでこれを防ぐためである。

(4) ハエのような昆虫、スズメなどの野鳥が、本病を伝播するから、これらを育雛舎や鶏舎内に入れないようにする。實際上これは無理な話ではあるが、病原の伝播をするこれらのハエやスズメを出来るだけ少なくすることが必要である。なお、他の養鶏場の人を鶏舎内に入れないようにすることも考えられる。

いろいろの報告によると、全く新しい鶏舎で育雛したひなにマレック氏病が発生して大害を与えたということもあるので、上記の方法で、マレック氏病が完全に予防出来るとは考えないが、予防法はこれしかないというのが現状である。

(松田 祐一)

